

明暗

映画文学人生論

野上彌生子 (1886-1986)

明暗 (1907)

縁 (1908) 「ホトトギス」

真知子 (1931) 「鉄塔書院」

迷路 (1948-56) 「岩波書店」

森 (1985-) 「新潮社」

明暗の著作者もし文学者たらんと欲せば
漫然として年をとるべからず

夏目漱石の門弟は多士濟々。その中で一番弟子
といえ、衆目の見るところ芥川龍之介だが、野
上彌生子をあげる人もいる。彌生子の享年は九十
九。漱石に比べて二倍、龍之介の三倍近く生き、
自伝小説『森』の完成直前に亡くなった。

彌生子の処女作は『明暗』。お蔵入りになった
が、漱石から懇切丁寧な指導を受けている。

「『明暗』の著作者もし文学者たらんと欲せば
漫然として年をとるべからず。文学者として生き
るべし」という漱石のアドバイスを忠実に守って
九十九歳まで生涯現役を続けた。こんな生き方を
見せつけられると、漫然として年をとった愚かな
老人は恥じて身のおきどころがなくなる。

『明暗』のヒロイン幸子は閨秀画家で、結婚な
どせず、画のために一身を献身的に過ごす覚悟で
いる。六年前、兄の親友から「僕は貴女の奴隷で
す」と告白された。しかし、彼は恋の未練をたち
きるために福岡大学へ転学した。明と暗と、暗と
明とは相入り、相乱れて終の運命に達する。

ところが、兄が嫁を貰うことになり、動揺して
いるところへ医学士になった彼から再び求婚され
た。こんどは幸子もなびきかけたが、危うく踏み
とどまり、「まあ、そんな話はよしにして、お茶
でも入れかへて参りましょう。ねえ、而して彼地



明暗

映画文学人生論

でのお嬢様の恋物語でも聞かせて頂きませう！」と淋しく微笑んで、後ろ向きになると、はらはらと涙がちったという結末。

「かかる変な女を描く事は一方から云へば容易なるが如くにて一方からは非常に困難なるものなり」と漱石は批評した。「変人なる故普通の人と心理状態の異なる所以を自ずから説明せざるべからず。之を説明せざる限りは読者は成る程と思へぬ也。然も其説明たるや全篇を読むうちにいつといふ事を知らぬ間に説明せざるべからず。是尤（もつと）も手腕の必要なる所なり」。

晩年の漱石は、連載小説の題名に『明暗』を選んだ。お延、お秀、清子、吉川夫人などの登場人物はみな変な女であるが、普通の人と心理状態が異なることをちゃんと読者に説明している。それにひきかえ、野上弥生子はまだ未熟だった。

彼女の習作は、「局部に苦心をし過ぎる結果散文中に無暗に詩的な形容を使ふ。然も入らぬ処へ無理矢理に使ふ。スキ間なく象嵌を施したる文机の如し。全体の地は隠れて仕舞ふ」。

「そりやそうだねえ」と云って、幸子は樹影をちらとあちら向く。この「あちら向く」は「千代が句の意味とは全然違ふ。千代の句の中には単に妙齡の少女の優しい嬌羞と云う要素が含まれているのにすぎない」とも指摘された。

姫百合や明るい方をあちら向き 加賀千代